

詩集

新しい記憶の場所へ

榎次郎

詩集

新しい記憶の場所へ

榊 次郎



榊 次郎（さかき・じろう）

1947 年大阪府生まれ

所属 詩人会議運営委員

関西詩人協会運営委員

大阪詩人会議編集長

1968 年 第1 詩集『20 年とはたち』私家版

1975 年 第2 詩集『未完・愛のメッセージ』同時代社

2015 年 第3 詩集『新しい記憶の場所へ』竹林館

現住所 〒 552-0012 大阪市港区市岡 1 丁目 4 番 26 号 ユニハイム市岡 901
pc address : nanohana114@baycom.zaq.ne.jp

詩集 新しい記憶の場所へ

2015 年 3 月 1 日 第 1 刷発行

著 者 榊 次郎

発行人 左子真由美

発行所 (株) 竹林館

〒 530-0044 大阪市北区東天満 2-9-4 千代田ビル東館 7 階 FG

Tel 06-4801-6111 Fax 06-4801-6112

郵便振替 00980-9-44593 URL <http://www.chikurinkan.co.jp>

印刷・製本 (株) 国際印刷出版研究所

〒 551-0002 大阪市大正区三軒家東 3-11-34

© Jiro Sakaki 2015 Printed in Japan

ISBN978-4-86000-298-5 C0092

定価はカバーに表示しています。落丁・乱丁はお取り替えいたします。

詩集

新しい記憶の場所へ

*

目次

I

愛^{いと}おしい球形

7

探^{たん}しもの

8

詩作あるいは絵画的風景

10

オマージュ

13

里子へ

18

挽歌・三月十一日へ

21

薄れゆく記憶

24

春の使命

27

II

秋色に恋して

31

旅への誘^{いざな}い

32

風に誘^{いざな}われて

35

恋ってなんですか

37

唄^{うた}ってよ ナナ

39

飽食の中で

42

所有の在処

45

遥かな旅人へ

48

III

寝てはならぬ 55

歳を重ねて 56

主夫の戯言 58

いのち繋がる早春 60

不思議な生きもの 63

一瞬の輝き 66

小さな訪問者 69

時計仕掛けの人生を 72

けものように 75

火を求め続けて 78

生き支度 81

IV

時空旅行 85

太郎・次郎・三郎物語 86

我がふる里・大阪まち物語 89

鶴橋・大阪まち物語 92

天王寺・大阪まち物語 95

V

半島へ続く道・大阪まち物語
 チン電でゆく・大阪まち物語
 なんでやネン

105

102 98

銀河鉄道のコールサック

109

マンボウと出会った日

110

いのちの水

113

秘密の前身

116

吉里吉里人からの進物

120

海峡のはざま

124

見える死と見えない死

130

新しい記憶の場所へ

134

非望

137

離島のいきさつ

140

出立

143

あとがき

147

*表紙写真／チュニジア・エルジエム競技場にて
 *扉写真／フイレンツェ・シニョーリア広場にて

撮影・著者

詩集

新しい記憶の場所へ

*

目次

I

愛^{いと}おしい球形

7

探^{たん}しもの

8

詩作あるいは絵画的風景

10

オマージュ

13

里子へ

18

挽歌・三月十一日へ

21

薄れゆく記憶

24

春の使命

27

II

秋色に恋して

31

旅への誘^{いざな}い

32

風に誘われて

35

恋ってなんですか

37

唄ってよ ナナ

39

飽食の中で

42

所有の在処

45

遥かな旅人へ

48

III

寝てはならぬ 55

歳を重ねて 56

主夫の戯言 58

いのち繋がる早春 60

不思議な生きもの 63

一瞬の輝き 66

小さな訪問者 69

時計仕掛けの人生を 72

けものように 75

火を求め続けて 78

生き支度 81

IV

時空旅行 85

太郎・次郎・三郎物語 86

我がふる里・大阪まち物語 89

鶴橋・大阪まち物語 92

天王寺・大阪まち物語 95

V

半島へ続く道・大阪まち物語
 チン電でゆく・大阪まち物語
 なんてやネン

105

102 98

銀河鉄道のコールサック

109

マンボウと出会った日

110

いのちの水

113

秘密の前身

116

吉里吉里人からの進物

120

海峡のはざま

124

見える死と見えない死

130

新しい記憶の場所へ

134

非望

137

離島のいきさつ

140

出立

143

あとがき

147

*表紙写真／チュニジア・エルジエム競技場にて
 *扉写真／フイレンツェ・シニョーリア広場にて

撮影・著者

新しい記憶の場所へ



I

いと 愛おしい球形

自転軸の角度に傾きながら
太陽の眼差しを浴び
真つ赤に輝いている

地球をりんごにたとえろと
地殻はりんごの皮より薄く
たった8 kmしかない所もあるという

落ちていくりんごを見て
両手を空に突き上げたあのひとより
僕は知っている

このりんごより
途方もない時間を駆けて熟した
愛おしい水の惑星の出来事を

探しもの

たったひと文字の接続を探しあぐねている

「が」にするか

「を」でいいのか

「は」であるべきか

たったひと文字の接続が

それまで書き連ねてきた

言葉の前に立ちはだかり 行く手を阻む

躊躇の狭間で過ちを繰り返してきた

私の生きざまさながらに

そそり立つ壁の前で

行き場を失くした言葉たちは
つんのめる形で
凍りついたままだ

詩作あるいは絵画的風景

厄介なものに魅入られた男の独白

白い紙の上に

言葉という線を引く

やがてそれらは

どんどん寄り重なり

人物なり 風景なりが

立ち上がってくる

暫くすると

言葉たちは色を付けてくれと言う
それが女の後ろ姿だったりすると